

リュブリャーナ大学における日本語教育実習プログラム

リュブリャーナ大学 若野 恵

リュブリャーナ大学日本語講座では、筑波大学と日本女子大学から日本語教育を学んでいる学生を受け入れて、年2回日本語教育実習を行っている。これは日本語教育を専門に学ぶ日本人大学生にとって、実際に教壇に立つ場を提供するのみではなく、日本人に接する機会の少ないリュブリャーナ大学の学生に、同年代の大学生と交流する機会を設け、学習動機を高める役割も果たしている。また、実習授業では通常の授業の中では盛り込みにくい活動を積極的に取り入れるなど、学習上の利点も大きい。

本稿では海外日本語教育機関としては比較的珍しい、日本語教育実習プログラムを紹介するとともに、実習生・実習授業受講生にアンケートを行い、両者の実習参加の目的・達成度・不満などを調査した結果を分析する。

1. リュブリャーナ大学における日本語教育実習プログラムの概要

実習は毎年2回、3月と7月に2週間行われる。1日90分、10日間のコースである。筑波大学（日本語・日本文化学類、地域研究研究科、文芸・言語研究科）及び日本女子大学（文学部）から希望者を募り、各回3人から5人くらいが実習生として参加する。実習にかかる交通費・滞在費はすべて実習生が負担する。リュブリャーナ大学側は実習参加者・教室の確保、実習生の滞在先の確保・実習の指導・評価を行い、実習終了後に筑波大学・日本女子大学に報告書を送る。筑波大学日本語・日本文化学類からの学生には、実習の成績も出す。これは単位として認められるものである。

本実習プログラムの特徴の一つに、リュブリャーナ側では教育実習のために新たにクラスを開講して学生を応募していることが挙げられる。これは単位にならない、任意参加のクラスである。実習生はそこで、基本的には何をしてもいいことになっている。参加者の大まかなレベルを知らされた後は、自分で10日間のカリキュラムを立てることになる。

クラスのレベルは、実習生の数によって毎年異なるが、他学部生・社会人・高校生などを対象とする初心者クラス、日本語講座1年生向けの初級、2年生向けの中級、3年生以上向けの中上級などが開講される（以後、実習参加者を「学生」と呼ぶ）。参加人数が多く見込まれる場合は、同じレベルのクラスを同時に2クラス開講することもある。

ここ3年ほどは、実習生は本講座の学生宅にホームステイすることが多い。ホストファミリーは日本語コース内で募るので、日本語学習者であるホストの学習動機が高まり、良い効果をあげている。

実習中は、実習生の教案をリュブリャーナ大学の教師（以後「教師」と呼ぶ）が検討・批判し、大まかな授業の流れを決めた後で、教材作成に入る。そして授業終了後直ちに反省・指導を行う、というのが一日の流れである。同じ教師が毎日同じ実習生を指導するわけではないので、実習生としてはいろいろな教師の指導が受けられるという利点がある反面、毎回それまでの授業の流れ、他の教師に指摘されたことなどをその日の担当教師に説明しなければならない煩わしさもある。

2. リュブリャーナ大学から見た日本語教育実習の意義と問題点

2.1. 学生から見た意義と問題点

実習生を受け入れることで、リュブリャーナ大学側には大きな利点がある。中でも利益を得ているのは学生だろう。先にも述べたように、リュブリャーナ大学では実習のために新たにコースを開講している。そのときによっても異なるが、だいたい1クラス5人から10人程度と、普段のクラスより少人数になるので、学生にとってはきめ細かい指導が受けられ、また、発言の機会が増える。

また、いつもとは違う、自分と同年代の実習生が来ることで、コミュニケーションの動機が高まる。実習生はスロヴェニアでの生活のことは何も分からないので、必然的に学生が説明しなければならないことは多くなるし、ホストファミリーになるとさらに会話の必要にさらされることになる。学生は日本の大学生の生活についても実習生からずいぶん教えてもらうようである。

授業面では、通常の授業内でなかなか扱えない会話をたくさん練習できるという利点が多い。実習生は授業の始めに、特に学習したい項目についてアンケートを行うことが多く、学生が苦手とすることを重点的に扱うこともある。また、実習クラスは成績評価の対象にならないため、学生は気楽に楽しみながら授業に参加しているようだ。

2.2 リュブリャーナ側の教師から見た意義と問題点

リュブリャーナ側の教師から見ても、実習の意義は大きい。

まず、通常の授業では十分にできない活動を実習でもらえる。これには、二つの利点がある。一つ目はもちろん、学生の日本語能力向上を助けてもらっている点である。実習クラスは学生の要望もあって、会話中心のクラスになることが多い。通常授業の中では一クラスの人数が多いこともあり、会話に重点を置いて進めるのが難しいのだが、実習クラスで行われる活動を通して、学生が話すことに抵抗を持たなくなる側面があるようだ。

二つ目は、リュブリャーナの教師が忙しさに追われて取り組みにくい活動にも、実習生が意欲的に取り組んでいくことで、通常の授業の活動の幅も広がることである。例えば、2001年3月の実習では2年生クラスでプロジェクトワークを行った。スロヴェニアガイドブックを作成し、それを実習生の知り合いの日本人に送るといったものだったが、実習終了後もガイドブックを受け取った日本人から次々お礼の手紙が届き、特に、その中に高校の先生がいたことから、一クラス分の高校生からも手紙を受け取るようになった。そこで、通常授業の中で実習参加者が作ったガイドブックや、高校生からの手紙を使い、読解練習や手紙の書き方指導を行った上で、手紙をくれた高校生一人一人に返事を書いて送るといった活動ができた。学科に実習生という「新しい風」が入ることで、通常授業にも新しい視点加わった例であるといえよう。

さらに、新しい教師・生徒募集にも実習は一役買っている。

実習クラスには全く日本語を知らない人のためのコースがある。このコースの参加者は他学部の学生・高校生・社会人と様々だが、毎年実習クラスで日本語にふれた後で、正規の学生・放課後コースの学生として日本語講座の学生になる人が何人かいる。無料の実習クラスは日本語講座の宣伝になっているわけだ。

教師募集にも実習クラスは大きな役割を果たしている。日本国外にある本学科は、教師の新規採用の際に日本で面接試験を行うのは難しい。しかし、実習生としてリュブリャーナに来たことのある大学生・大学院生達なら面接をしなくても人物は分かっているし、模擬授業もたっぴり見せてもらってる。実際にリュブリャーナ大学で働いている（働いていた）教師は、実習生としてリュブリャーナに来た経験がある人が多い。これは、実習生側もこちらの様子が分かっているので、募集に応えやすいということもあるだろう。

多くの利点がある一方、実習にともなう問題点もやはりある。

一つは、教師の負担である。通常の授業の上にさらに実習を行うことになるので、特に3月の実習は時間的負担が大きい。自分の授業の合間に学生の教案を見て指導を行い、夕方実習クラスを見た後反省・指導をしていると、夜の9時までかかってしまう。3月は日本の大学が春休みのため客員教授も多く来る時期でもあり、この時期は実習と接待で教師は疲れ切ってしまう。

もう一つは実習生・実習クラスための環境整備が難しいことである。実習生と実習クラス参加者の数がうまく合わない、ホストファミリーが集まらない、実習クラスのための教室が確保できない、実習生のための準備室がとれない、と苦勞の種は尽きない。これも、やはり通常クラスと平行で行われる3月の実習の方が、状況は厳しい。

また、学生にとっても3月は通常授業に加えて実習クラスに出ることになるので、時間的負担は大きいはずである。しかし、アルバイトや旅行で忙しい7月に比べて、かえって実習に参加しやすいと考える人もいるようである。

実習生はなぜ3月や7月を選んで実習に来たのだろうか。彼らは実習に何を求めていたのだろうか。それらの目的は達成できたのだろうか。次の項では実習生に行ったアンケートをもとに、彼らの動機と実習後の感想を分析していく。

3. 実習生へのアンケートとその結果

アンケートは1999年から2001年までにリュブリャーナ大学に実習生として来た筑波大学の大学生・大学院生に対して行った。実習生が卒業したり、連絡が取れなかったりで、参加者全員にアンケートを実施することはできなかった。回答数は9名、そのうち学部生が6名、大学院生が3名である。

3.1 実習の時期について

先の2.2でも問題になっていたように、なぜ実習生が3月、または7月を選んで実習に参加したのか尋ねてみた。3月に来た実習生は「修論の都合」が2名、「日本語ボランティアの都合」が1名。7月は「3月は就職活動があるから」が2名、「夏休みで余裕がある」「早いうちに実習をした方が今後の授業に生かせると思った」がそれぞれ1名である。

大学院生にとって7月は修士論文のための調査が大詰めにかかる時期であり、心理的にも修士論文以外のことに取り組みにくいということがあろう。一方、学部4年生にとっては3月は就職活動の上で大事な時期であり、なかなか海外に出ている暇ができないのだろう。実際、実習に来る学部4年生は大学院進学を考えており、就職活動をしない人がほとんどだった。3年生の7月、または2年生の3月が実習に来やすい時期なのだろうか。

3.2 実習に参加した理由

実習生はなぜ自分で多くの費用を払ってまで、リュブリャーナ大学に来たのだろうか。複数回答で答えてもらった。

一番多かった答えは「日本語を教える機会を持ちたかった」（8名）というものである。そして「海外で日本語を教えてみたかった」（6名）、「海外での日本語教育の実状を見たかった」（2名）、「先生に勧められた」（2名）、「旅行のチャンスだと思った」「スロヴェニアに興味があった」「今後の就職に有利だと思った」（各1名）と続く。「その他」の欄に「友人に勧められた」「細かい点まで指導してもらえる環境がある」と書き込んでくれた人もいた。

やはり、実際に教壇に立つ、海外の教育現場を自分の目で見ると、というのが参加の動機となるようである。

3.3 実習前にリュブリャナ大学から知らせて欲しかったこと

では、実習生がリュブリャナに来る前に不安に思うこと、事前に知りたくなることは何だろうか。答えはやはり、クラスに関することが多い。「教える学生のレベル」「クラスの人気」「リュブリャナにある教材」(各6名)、「実習中の滞在先」「普段使用している教材」(各5名)「実習で使用する教材」(2名)「コンピュータ環境」「スロヴェニアの生活情報」(各1名)となった。これらは「知らせて欲しかったこと」ではあるが、「知らせてもらえなかったこと」ではない。ただ、リュブリャナ側もこの答えに留意して、実習生と連絡を密にし、実習生が不安なく来られる環境を作るべきである。また、毎年2回実習生が来ている訳なので、日本でも実習生OBが新実習生の質問に答えてあげられる場を設けるといいのではないだろうか。

3.4 実習に来てから「あらかじめ知っておきたかった」と思ったこと

この質問項目は前項とは異なり、予想しなかった「知っておきたかったこと」についてである。実習生同士、実習生とリュブリャナの教師の間で連絡が密にとれていて、驚いたことはなかった実習生も多かったようだが、この項目の回答として「気候」「教材の有無」「ホームステイ先の学生の興味」「学生が習ったことをすべて覚えているわけではないこと」(各1名)が挙げられた。最後の回答は、それを知ることができたことが実習の一つの成果だと思うが、それ以外のことはリュブリャナ側と実習生との連絡を密にして解決していくことができる問題であろう。

3.5 実習クラスの学生数について

実習参加者と実習生の数によって一クラスの人数は年によって違う。実習生が実際に担当した学生数とその感想を聞いてみた。

25人のクラスを持った実習生は、「多すぎた」と答えている。15人から8人までのクラスを持った実習生4人は「ちょうど良かった」、8人、6人のクラスを持った実習生2人は「やや少なかった」と回答した。3人というクラスを持った実習生はやはり「少なすぎた」と答えている。20人弱から8人程度が、実習生にとっても1クラスとして教えやすい人数であるようだ。

3.6 授業に関することで辛かったこと

実習生の多くは、実習クラスで初めて教壇に立つ。彼らは実習全体を通して激しい緊張と不安にさらされるはずである。授業に伴う苦痛は健全なものだが、それ以外に実習生を苦しめた要素があれば、実習に集中してもらうためにもそれを取り除けるに越したことはない。ここではホームステイ・生活のことを除き、実習プログラムの中で辛かったことを書いてもらった。

トップはもちろん「教案を考えること」(8名)である。これと「実際に授業を行うこと」(2名)「学生の質問に答えること」「学生とのコミュニケーションに使う日本語に制限があること」(各1名)は成長過程の苦しみであり、健全なつらさだと言える。しかし、教師は学生が必要以上に苦しんでいないかを見定め、適切なアドバイスを与えて学生が追いつめられないように気を配る必要があるだろう。

「実習生のための準備室のコンディションが悪くなかったこと」「教室などのコンディションが悪くなかったこと」(各2名)というのは、リュブリャナ大学の設備上の問題である。教室の確保は特に3月は困難で、どうしても人気のない地下のLL教室しか空いていないことになる。これは、実習生募集をする際に、あらかじめ3月と7月のメリット・デメリットとして提示し、覚悟してきてもらうべきかもしれない。「授業が終わると夜で、何もできないこと」というのも、3月の実習のデメリットとしてあらかじめ知ってもらいたいだろう。

「一つのクラスにレベルの違う学生がいたこと」(1名)というのは難しい問題だ。クラスがたくさん作れるときはきめ細かいレベル分けができるが、なかなかそうもいかない。実際に実習生が教師となったときにもこのようなことは日常的に起こるだろうから、そのような状況への対応も実習のうちと考えて、柔軟に対応してもらいたいだろう。

3.7 実習の満足度

実習をさせてもらった側にアンケートをされて「散々だった」とは答えにくいだろう。実習の満足度を尋ねたこの項目はやはり「大変良かった」(8名)「良かった」(1名)という結果だった。理由を自由記入方式で挙げてもらった。「教壇に立つ経験がもてた」「日本語教育に関する様々なこと(教案の作り方・授業の進め方など)を学んだ」「日本語教育の現場がどういうものか肌で感じる事ができた」「教室外で日本語を使うことのない学生の日本語教育について考えさせられた」「中級クラスの授業運営を経験できた」「2週間集中して授業を受け持つことができた」「自分の至らなさが分かった」「初めは緊張したが、終わる頃にはそれもなくなって教壇に立つことの違和感がなくなった」「普段経験のある教師に細かい指導を受けることができた」「良い仲間と出会えた」「スロヴェニア人の良いところがたくさん見られた」「スロヴェニアの人と交流できた」となっている。

まとめると、実際に教える経験をもつことで、様々な問題点に気づいたこと、海外の日本語教育の現場の雰囲気を知ることができたこと、スロヴェニア人と交流できたことが達成感として満足につながっているようである。

3.8 実習の改良点

では、実習参加者から見て、実習の改良点としてどんなことが挙げられるだろうか。用意した項目の中では「実習の日程」（2名）、「1クラスの人数」（1名）が選ばれた。「実習の日程」は7月に参加した実習生からのコメントである。実習日程が大学の試験の直後、あるいは終わりにかかるくらいに設定されていることに対する不満である。しかし、これ以上遅い時期に実習を設定すると、リュブリャーナの学生はみんな休暇で学校に来なくなってしまうので、なかなか難しい注文だと言える。クラスの人数は、どうしてもばらつきが出てしまうので、リュブリャーナ側でも努力はするが、調整は難しい。

「その他」の自由記入欄には多くの答えが書き込まれた。「実習前にクラスの雰囲気を見るために、授業の見学ができれば良かった」。これは実習生が早くリュブリャーナに来ることも可能なことを伝えれば良かったといえる。「夏は航空券が取りにくいので、募集は早いほうがよい」「テスト期間中に出発するのは大変（7月の実習生）」「実習指導の担当者が代わる度に前日までの流れの説明をするのは大変」。最後のコメントについては、実習日誌をつけるなどして解決できることであろう。

3.9 まとめ

以上、実習生を対象に行ったアンケートを分析した結果、実習生は実際に教壇に立つこと、海外の日本語教育事情を知ることなどを主な目的として実習に参加していることが明らかになった。リュブリャーナ大学教育実習プログラムの特色である、実習期間の長さ・指導の細かさは実習生に評価されている。

受け入れ側では3月の実習は負担が多いが、実習生はむしろ7月の実習に日程的な困難を感じているようである。一方、3月の実習生は教室・時間など、実習を取り巻く環境について問題を感じていた。実習時期については、あらかじめ日本側にそれぞれの時期に来るメリット・デメリットを提示し、実習生に心の準備をしてきてもらうことである程度の改善は見られるであろう。また、2001年3月の実習は、実習生の数を少なくしてみる予定も立てられている。

実習前の不安、実習に来てからのショックの軽減には、実習生とリュブリャーナ側・実習生OBと新実習生が連絡を密に取り、情報収集をすることが役に立つと思われる。実習生のサポートは日本側・リュブリャーナ側双方が気を配るべきであろう。

4. リュブリャーナの学生へのアンケートとその結果

アンケート調査は実習クラスに参加したことのある学生を対象に行った。回答したのは1999年から2001年までの学生25人である。レベルは様々である。一人で何度も実習に参加した人もアンケートには1回だけ答えてもらった。

4.1 実習クラスに参加した動機

実習クラスに参加した動機を複数回答で答えてもらったところ、もちろん一番は「日本語が上手になりたかった」というものである。中でも「話すことが上手になりたかった」（11名）が一番多く、「聞くこと」（9名）、「書くこと」（5名）、「読むこと」（4名）の順である。「文法の分からないところが分かるようになりたかった」（7名）と答えた人もいる。日本語力向上、特に会話能力を向上させたいと思う学生が多い。また、「日本の文化を知りたかった」（16名）という答えも多い。ほかには「友達が実習に参加したから」「先生が出た方がいいといった」（各4名）、「実習生と友達になりたかった」（1名）という答えであった。その他として自由記入してもらった動機には「日本に行きたいから」（2名）、「日本に友達がいるから」「日本語の構造に興味があった」「どのくらい難しいか知りたかった」（各1名）が挙げられた。

日本語講座以外からの学生である初心者コースの人は、日本の文化に興味を持ったり、実際に出張などで日本に行く予定がある人が来ることが多く、講座内の学生は、主に日本語力向上を目指してきているようである。

4.2 実習に参加しての感想

実習に参加しての全体的な感想は「とても良かった」（15名）、「良かった」（9名）、「まあまあ良かった」（1名）と、満足度は高い。

一方、日本語が上手になったかと思うかという問いに対しても「とても上手になった」（12名）、「少し上手になった」（5名）、「上手になった」（6名）と、実習に参加したことで日本語力が向上したと自覚しているようだ。成果があったと思えた場合は、次回の実習に参加する意欲もわくであろう。しかし「自分では分からない」（2名）という答えもあった。

実習生に対する感想は、「とても良かった」（20名）、「良かった」（5名）と、大変評価が高い。

実習について良かったと思う点を問うてみると、「いつもとは違う活動ができた」（13名）、「分からなかったことが分かるようになった」（9名）、「普段とは違う先生に教えてもらった」「日本の文化を知ることができた」（各7名）、「先生と友達になれた」（4名）という答えが挙げられた。自由回答欄には「雰囲気が良かった」（3名）、「教え方が良かった」「日本語だけでクラスが受けられた」（2名）、「短い時間に多くのことを学ぶことができた」「日本語を忘れないでいられる」「ゲームが面白かった」（各1名）といった答えが出された。

初心者には日本語に触れられたことを評価し、講座の学生はいつもと違う教師・授業に触れられたことを評価しているようだ。

4.3 実習について良くなかったと思う点

では、学生から見た実習の改善点はどのようなことだろうか。複数回答の項目選択式にしたが、この欄にチェックをする人はあまり多くなかった。しかし、主にクラスの時期、そして若干実習生の授業方法に問題を感じる人が多かったようだ。

クラスについては「クラスの始まる時間が遅い」（6名）という回答が多かった。これは3月の授業が6時から始まる点を指しているものと思われる。しかしこれは教室確保、学生確保の両方の面から変更するのは難しいであろう。ほかに「クラスの時期が悪い」（2名）という回答が7月の参加者から寄せられた。「学生が少なすぎた」（1名）という回答もあった。また、「後ろにいつも先生がいて授業を見ているのが嫌だった」（5名）という答えもあったが、これはやはり指導上仕方ないことであろう。自由記入式の答えとしては「もっと長い期間やって欲しい」（4名）、「他学部の教室でクラスがあるのが嫌」「一日の時間数を増やして欲しい」という答えが挙げられた。実習時間や期間を変えるのは、かなり難しいし、空き教室のない3月に他学部の教室を使うのは仕方ないことなので、問題点の改善は残念ながら難しいようだ。

実習生の問題点としては「文法などの説明が悪い」（2名）、「指示の内容がわかりにくい」（1名）というものが挙げられた。その他、記入式の答えとして「プリントをつくって欲しい」（4名）、「新しい単語は板書して欲しい」（2名）、「フレーズや動詞は英語で説明して欲しい」「先生が自分の答えをチェックしようとして待ちかまえている気がした」「文化の時間が短すぎる」（各1名）ということと答えが挙げられた。学生の中には、経験のない実習生の授業にとまどう者もいるようだ。また、特に初心者は新出項目を、プリントや板書などで確認しようとする傾向があることを実習生は気にするべきであろう。

4.4 今後どんな実習を望むか

自由記入式で書いてもらったが、この質問項目ははっきり二つの傾向に分かれた。日本文化を教えて欲しいというものと、もっと続けたいという初心者の要望である。

前者は「ゲームをしたり音楽を聴いたりしたい」「映画やアニメを見たい」「料理のような活動がしたい」「日本文化・生活・社会について知りたい」（各2名）、そして後者は「もっと長い期間クラスをやって欲しい」「続きのコースが欲しい」（各3名）、「勉強を続けるための教科書が欲しい」「書き方・読み方の初心者コースが欲しい」（各1名）であった。

続きをやりたい学生には、放課後の初心者向け1年間コースがあるので、そちらに来てもらえばいいが、文化への要望はこれから来る実習生に伝えるべきであろう。実習生はどうしても「日本語を教える」ことで頭がいっぱいになりがちだが、学生の方は日本文化も教えてもらいたがっているようだ。これらの要望は、先の実習へ生かしていくべきであろう。また、文化だけを教える実習生を受け入れることも考えてもいいかもしれない。

4.5 まとめ

学生は日本語能力の向上と日本文化を知ることが目的として実習に参加している人が多く、実習への満足度も高いようだ。新しい先生に接し、普段とは違う授業をすることが満足度につながっている。特に、映画・音楽など、文化的な体験をしたり知識を得ることを求める参加者が多いのは、実習生にもあらかじめ知らせておいた方がよいようである。

しかし一方、クラスの開設時間・場所・時期・期間などには不満も多い。これらはしかし残念ながら変えにくいことが多い。

5. まとめ

教育実習プログラムは、実習生・リュブリャーナの教師・リュブリャーナの学生いずれにとっても意義の大きいものであるが、特に3月の実習は教室確保・教師の時間的負担など、リュブリャーナ側には問題点も多い。しかし3月・7月それぞれの時期に参加した実習生にはやはり彼らなりの事情があり、どちらか片方だけにするのは難しいようだ。

実習生は当初の参加目的をおおむね達成して実習を終了するが、クラスの人数・教室のコンディションなど、細かい点では問題点も感じている。実習に参加した学生も、クラスに満足しているが、文化的な内容を取り扱って欲しいという要望が多い。

リュブリャーナ側が、事前に実習参加者に知らせておけば解決するような問題点もあったので、ここの実習生との連絡だけではなく、プログラム全体についての説明を作成することが有効であろう。

<参考文献>

石田敏子・堀口純子・砂川有里子・西村よしみ(1993)「日本語教育実習に関する実証的研究」『日本語教育』79号 pp.160-170

斉藤令子・今尾ゆき子・稲葉みどり・田中京子・出口香(1992)「日本語教育実習への提言-実習経験をふまえて-」『日本語教育』76号 PP.55-66